［特集1］

ステージに立つ指導者たち

皆さんは、ピアノ指導のかたわら、「自らがステージに立つ」という活動をどのような頻度で、またどのような場で行っていますか？そういえば生徒はピティナ・ピアノコンペティションやピティナ・ピアノステップ、発表会の機会にステージへ送りこむが、私は演奏から遠ざかっているのでは、と感じる方、いらっしゃいますか？

今回の特集では、演奏家を活動の主体としているのではなく、ピアノ指導を本業としながらも自らが「演奏する」活動を大事にしている先生方をご紹介します。地域での演奏が地域貢献や身近なネットワークづくりにどのように役立っているのか、「常にステージに立つ機会を持ちつづけること」が自らの指導にどのように生かされているのか、などの視点から、演奏し続ける大切さを「ステージに立つ指導者たち」というテーマで、掘り下げてみたいと思います。

指導者もステージへ！
多摩ステップ&セミナーリポート

11 月 17 日、エプタザール（東京都狛江市）にて多摩ステップ、翌日 18 日はスガナミ楽器多摩店にて池川礼子先生と多喜靖美先生を講師に迎え、セミナー「学び続ける指導者たち」が開催された。

ステップリポート

「指導者もステージへ！」のコンセプトのもと、11 月 17 日にエプタザール（東京都狛江市）にて多摩ステップが開催された。これは、ジャスミン音の庭ステーション代表の多喜靖美先生の発案によるものである。ソロでは出にくい方も参加しやすいようにと、室内楽企画を採用。室内楽の分野では、子どもが楽しく室内楽を学ぶことを目的とした「学ぼう！しつないがく」、「室内楽体験」（大人対象）、ジャスミン音の庭ステーション室内楽クラスの方が成果発表会として出演できる「室内楽クラス修了コンサート」を設定した。そのほかピアニストの松本あすかさんと鍵盤ハーモニカ、ピアノで共演できる「あすかと遊ぼう」、「おはなしとピアノ『ながぐつをはいたネコ』」といった計5つの企画を打ち出し、ピアノの楽しみを最大限に広げる試みがなされた。

当日は、参加者 80 名のうち、ピアノ指導者は実に 30 名。多喜先生の熱心な声かけの成果である。中には、遠く九州の鹿児島から池川礼子先生、長崎の中村美穂先生、大阪の森山純先生といった、ピティナでも審査員やアドバイザー、ステーション代表を担う先生方が集まり、室内楽で出演した。

当日のアドバイザーは、二宮裕子先生、長谷正一先生、ステーション代表の多喜靖美先生の 3 名。二宮先生からは、「私たち指導者が演奏する姿を生徒たちに見せて、『あのように弾けたらいいな』という気持ちを起こさせる、私たちはこういうことをもっとやらなきゃいけないと思いました。今回、このような企画をしてくださった先生方にお礼を申し上げたい。」と講評もいただいた。

◀アドバイザーの先生方と継続表彰者

弦楽器共演者

石豊久先生（Vc）、清水醍輝先生 (Vn)、篠崎由紀先生（Vc)、荻野照子先生 (Vn)、中西弾先生 (Vn)、七澤清貴先生 (Vn)、原口梓先生 (Vc)

セミナーリポート

翌日は、池川礼子先生とステーション代表の多喜靖美先生によるセミナー「学び続ける指導者たち」が実施された。多喜先生から多摩ステップにかける思いが語られた。

ピアノ指導者に自信を

多喜靖美先生
当協会評議員、指導法研究委員会アンサンブルグループリーダー、ジャスミン音の庭ステーション代表

多摩ステップのコンセプト「指導者もステージへ！」を私が考えるのに至ったのは、私が大人の生徒さんを教える機会が多くなったことが、ひとつあげられます。出産を機に、レッスン時間の関係から年齢の小さなお子さんよりも大人の生徒さんを教えるようになったんですね。生徒の多くはピアノ指導者ですが、中にはアマチュアで頑張っていらっしゃる方もいます。ピティナでもアマチュアの方がどんどん出てくる一方で、ピアノの先生が演奏に対して自信をなくしてきているんじゃないかな、と。ピアノ指導者にもっと自信を持ってもらいたい、と思ったのがきっかけです。

ピアノを弾けることは貴重な存在

もうひとつは、私が母親になって、息子を通じての'お母さん仲間'と、いわゆるお友達として交流する中で「ピアノが弾ける私というのが結構貴重な存在なのかもしれない」と思ったんです。それまで、あんまり意識していなかったのですが、彼女たちが「ピアノが弾けるなんてすごいね、いいね」と言ってくれるんです。私が忙しく仕事をしているので、息子のことでは彼女たちに大変助けられています。そこで私が恩返しできることは何だろう？と考えたとき、それはやはりピアノを弾くこと、つまり音楽での還元じゃないかなと気づいたのです。そのとき初めて「身近な方への恩返し」という地元意識を持ちました。

私が昨日のステップの中でも取り入れた「お話コンサート」、これは地元の病院のロビーコンサートの際に生まれたものなんですよ。『ヘンデルとグレーテル』のお話のその場面場面にあった曲、しかもよく知られた曲を選ぶんです。例えばブルクミュラー。ブルグミュラー20曲を続けて聞いても飽きてしまうでしょうが、お話を織り交ぜたら聴いてくれるかなと思ったところ、子供だけでなく大人の入院患者さんも大変喜んでくださいました。朗読は、そのときの幼稚園のお母さん仲間にお願いしたのですが、一緒にあわせていくうち共演者のような気分になれるものですね。私も彼女の朗読のトーンで次の曲のイメージを決めて、彼女は私の演奏を聴きながらお話をして、ということで、終わったときには二人が一緒に何かをやったという気分になりました。「ああ、こういうことをやるのがいいのかな」と気づきましたね。

先生方には、ソロでなくてもどのようなかたちででも、ぜひ演奏をしていただきたい、と思っています。生徒に弾き続ける先生の姿を見せることは大事です。勿論、中には私よりうまく弾ける生徒だっていますよ。それでもいいんです。ステージ本番の直前直後の心理って、ポジティブだったりネガティブだったり、複雑ですよね。そういった心理状態を生徒とともに共有することです。決して言葉だけの先生になってほしくないな、という気持ちでいっぱいです。

アンケートより

ピアノ指導者の演奏活動の実態

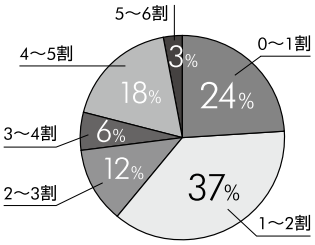
ピアノ指導と演奏活動。ピアノ指導をメインにしながら、生徒をステージへ送り出すだけでなく、自らもステージに立つ場をもつピアノ指導者は大勢いる。

彼らにとって、ピアノに関する活動の中で演奏活動はどのくらいの割合を占めるのか？その回数は？また、演奏活動はピアノ指導にどのような影響を与えているのか？アンケートにご回答いただいた中からその実態をさぐってみたい。

※アンケートは、ピティナ・ピアノコンペティションとピティナ・ピアノステップに多数の生徒参加歴をもつ先生方を対象に実施した。

1. データに見る、演奏活動の実態

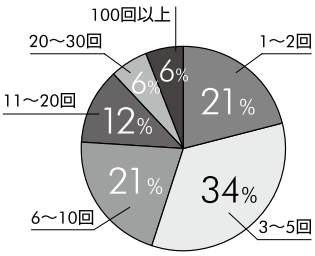
Q ピアノに関する活動の中で、演奏活動はどのくらいの割合を占めますか？



「演奏活動は、ピアノ活動全体の２割以内」が過半数

ピアノ指導がメインの先生方。「現在演奏活動をしている」と回答した先生方の中で、ピアノ活動全体の中で演奏活動が占める割合は、「1割〜2割」と答えた方が37%と最も多かった。1割以内と答えた先生方と合わせると過半数となる。6割以上と答えた先生はいなかった。

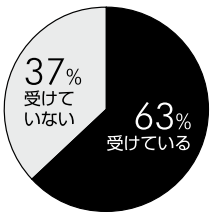
Q 年間に何回の演奏機会がありますか？



「演奏機会は年間３〜５回」が全体の３分の1

「現在演奏活動をしている」と回答した先生の中で、演奏機会については、年間3〜5回が最も多く全体の3分の1を占める。だいたい季節に1回ずつというのが、ペースだろうか。中には年間100本を超える演奏機会を持つ指導者もいる。

Q 演奏活動のためにピアノレッスンを受けることがありますか？



ピアノ指導者も、演奏会前にはレッスンを

演奏会前には、さらにワンランクアップしたピアノ指導者にレッスンを受けることは、主流のようだ。第三者の客観的な意見を求めたい、自分の気づかない点を指摘してほしい、などの理由で仕上げの完成度を高めるためであろう。また自分の生徒へのピアノ指導にも、その場で習得した演奏技術、演奏表現を生かすことにも活用している。自身が学生時代に師事していたピアノ指導者、あるいはセミナーなどで出会いその指導方針に共感しレッスンを受けるようになった指導者、様々なパターンがあるようだ。ピアノ指導者も常に学び続けているのである。

2. 演奏活動がピアノ指導へ与える影響

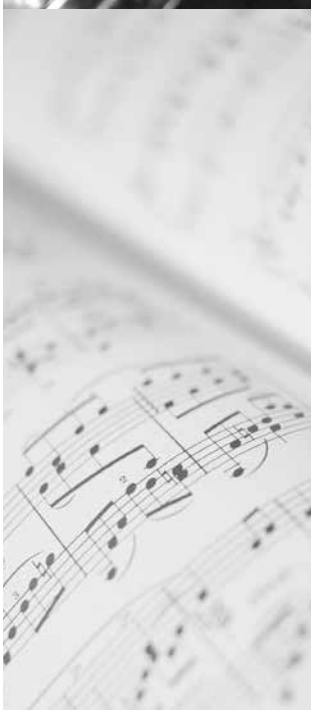
◎自分の演奏が生徒の具体的な見本に

演奏活動はピアノ指導へどのような影響があるのだろうか？まずは、演奏技術の面から。

「音作り、曲作りを自ら体験することにより、指導がしやすくなる。年々、生徒の音や、仕上がりがよくなってきていると感じる。」「常に新しい音色を増やそうとしている。その重要性も生徒に実音で伝えられる。」「自分自身の演奏を通して、タッチの違いを直に伝えることができる。」「自分の演奏する姿を生徒に見せることで、日頃レッスンで注意していることを実践で見せることができる。（見に来ていた生徒から「ペダリングが参考になった」と言われた。）」など、ピアノ指導において、生徒に伝えたい演奏技術や演奏表現を具体的な見本としてみせることができるという意見が届いている。実際の演奏にまさる最適な見本はない、ということだ。

また「声楽や器楽のアンサンブルを通して知り合った先生方の演奏を生徒に紹介できた。ピアノ以外の楽器の音楽に触れさせる事ができ、生徒の音への関心が高められる。」など演奏活動によって培った人脈が生徒へ還元できるという声もあった。

◎先生の「弾き続ける」姿が、生徒の学習意欲につながる



もうひとつはメンタル面である。生徒は、先生が演奏する姿を見て、「先生も自分たちと同じように演奏し、勉強し続けているんだ」という共感を持つようになる。そのことが先生への尊敬、自らのピアノ学習意欲へとつながる例も少なくない。

「生徒と共に学んでいるという姿勢を示すことができる。」「お互いにモチベーションの向上を図ることができる。ピアノステップで継続表彰をしていただいた時に大人の生徒さんたちに、『自分もがんばる気持ちになれる』と言われた。」「自分が目標を持って向上に努めることによって、細かい指導ができる。」「生徒にオーケストラとのコンチェルトや室内楽演奏会を見てもらうと、自分も同じようなステージに立ちたいという夢を持たせられる。」「ピアノを弾き続けるという事が人生においてどういう意味を持つのか、生身で見せられる。」「ステージに立つことにより、生徒達のコンペの前の緊張感をよく理解してあげられる。自分も舞台に立つ事の恐ろしさと常に向き合っているので、失敗した生徒を叱る事が無い。生徒が『先生は僕達の見方なんだ！いつも舞台で苦しい思いをしているから、僕達の辛さもわかってくれる。』と言ってくれた。」

次ページからケーススタディとして、様々な演奏活動の事例を紹介していく。

コンクールのステージで演奏力を磨く

2005年ピティナ・ピアノコンペティショングランミューズ部門A２カテゴリー第１位、2007年はA１カテゴリーで入賞を果たされた竹本絵己先生。現在、２月23日のグランミューズ部門入賞者記念コンサートに向けて、練習に忙しい日々を送っている。先生は、komaki桃花ステーション代表として、毎年ピティナ・ピアノステップを開催しており、音高受験の生徒を多く抱えるピアノ指導者でもある。ピアノ指導の傍ら毎年コンペティションに挑戦されるそのモチベーションはどこから来るのか？生徒に与える影響とは？竹本先生が現在レッスンを受けている清水皇樹先生と一緒にインタビューした。

竹本絵己先生
Komaki桃花ステーション
代表、当協会正会員

清水先生との出会い

―――竹本先生が清水先生に習い始めたきっかけについて教えてください。

竹本　清水先生にレッスンを受け始めたのは、9年前です。実は、清水先生が高校生当時、私がその高校でソルフェージュの聴音の授業を週1で受け持っていまして、それが最初の出会いなんです。とても優秀でいらして、記憶に残っています。再会したのは、清水先生が出演された地元のモーニングコンサートのとき。約15年ぶりにお会いしまして、その際に私の発表会でのゲストとしてソロ演奏と私との連弾企画をお願いしました。それを機会に、清水先生にレッスンをしていただくようになりました。

――― 清水先生に習い始めて、ご自身の演奏が変わったと思うことはどのようなことでしょうか？

竹本　「ピアノを弾くことはこういうことなんだな」と認識を新たにさせられたことでしょうか。今まで、ピアノを弾くということは主に自分と鍵盤の間のことしか考えたことがなかったんです。清水先生は、「自分の音が全ての聴衆に香りとなって届くように」とか「音の粒を天から授かるような、それが自分の手を通して音となって出ていくように」という表現をされます。感性のアンテナを常に高く張っていないと、そういう言葉でのレッスンにはついていけません。

コンクールに参加し続ける原動力

―――竹本先生は、ピティナのグランミューズ部門を含めコンクールに参加し続けていらっしゃいますね。ピアノ指導をされながら、さぞ大変なことではないかとお察しいたしますが。

竹本　はじめ地元のコンクールに参加したとき、実は15年ぶりの人前でのソロだったのですが、緊張のあまり膝がわらってしまって大変でした。そのとき「人前に出ることに慣れなくては」と痛感したのです。育児も少し落

▲清水皇樹先生（右）愛知県立明和高等学校音楽科教諭、当協会正会員
（清水先生のレッスンにて）

ち着いた時期で「今ピアノを弾くことをしなかったら、この先ずっと弾くことから逃げて教えるだけになる」という恐怖心もありました。高校・大学時代、コンクールに出るという挑戦を私はあまりやってこなかったため、その分今やらなければという思いも強かったですね。今現在も同じ思いです。

――先生は、コンクールのほかコンサート等演奏活動をされていますよね。同じ「ステージに立つ」ということでもその姿勢は異なると思いますが、それはどのような点でしょうか？

竹本　コンサートではお客様にいかに楽しんでいただくかと気持ちが外に向いていますが、コンクールの場合は「自分はどうするか」と意識が自分に向いている点です。清水先生もおっしゃられたのですが、「コンクールは勝ちに行かなきゃ」と。ただその「勝ちに行く」姿勢が露骨に出てしまい、うまく行かなかったこともありますが。

ステージ前の心理状態、私、実は結構好きなんですよ。暗い舞台袖で待ちながら、ストレッチをやってます。そしていざステージへ出て行くとき、「ティンカーベルが金粉を撒いてくれるような」イメージですね、ステージ用の自分になって明るいステージへ出て行き、皆が自分に注目する、その瞬間が好きですね。弾き終わった後は落ち込んでしまうことの方が多いですけれど。

「先生は今何の曲やってるの？」生徒からの質問に答えられる喜び

――ピティナのコンペでは、生徒さんもコンペに出られて、先生も部門は違いますが同じコンクールに出る。そのプレッシャーはありませんか？

竹本　それはないです。生徒は私を同列だと思っているようです。「自分もコンクールに出るから、先生も出る」というように。たとえ生徒が通って私が落ちてしまっても、「自分は先生の分まで頑張ってくるから」と言ってくれますよ。

――先生自身が弾き続ける姿を見せること、弾いている音楽を聴かせることで生徒さんに何か伝わっているなという実感はありますか？

竹本　それはありますね。生徒がよく「先生、今何の曲やっているの？」と聞くんですよ。そのとき、生徒に答えられて、良かったなと思います。ステージで弾いているのを見てもらうのも影響があると思いますね。ある生徒が「自分たちは今子どもだから練習して一生懸命やっているけれど、先生くらいの歳になってもおじいさんになってもまだ弾いているかな」という話をよくするんです。彼が私を例に、一生ピアノを弾き続けていくことを考えてくれるのは嬉しいと同時に舞台人から逃げられなくなってしまいましたね（笑）

清水皇樹先生より

初めての竹本先生のレッスンの頃から考えると、もともと先生が持っていらっしゃるアーティスティックなものが少しずつかたちになって、それが徐々に音になって出てくるよう変化していらっしゃると思います。「作品をいかに表現するか」という意味で同じ芸術家として対等だと思っています。僕は聴いて感じたことを好き勝手に言っているだけですよ。

僕にとってのステージとは、非日常的なものをつくりだす場だと思います。作曲家のファンタジーを聴いている皆さんと共有できる、ほとんど奇跡のような空間と言ってもよいのではないでしょうか。

自宅サロンでアンサンブルを

ピティナでは、コンペ課題曲セミナーや公開レッスン、ステップアドバイザーとして各地で大好評を博している金子恵先生。先生は、西武ハーモニーステーションの代表として、室内楽をテーマにしたステップを開催したり、室内楽勉強会の講師もお務めになるなど室内楽の分野でもご活躍なさっている。1年前に新設したサロン「パパゲーノ」では、旦那様でヴァイオリニストの田辺秀樹先生とともに室内楽コンサートを主催。

お二人の室内楽の演奏活動とは？また身近に他楽器奏者がいることは、互いにどのような影響があるのであろうか？

田辺秀樹先生（左） 定期的に日本各地及びヨーロッパで演奏活動中、ピティナ西武ハーモニーステーションの室内楽勉強会講師も務める。
金子恵先生（右） 桐朋学園大非常勤講師、国立音大専任講師、当協会正会員、指導法研究委員、ピティナ西武ハーモニーステーション代表

――演奏の機会はどのくらいの頻度であるのでしょうか？室内楽をされはじめたのはいつからですか？

金子恵先生（以下金子）　私の場合、学生時代から室内楽には興味を持っていたんです。大学でも自ら室内楽の授業を専攻していました。ソロでは息詰まってくるのを室内楽は、緩和してくれるんですよね。音楽を客観的に見ることができるようになるんです。音楽を複数人で共有しつくりあげていく、そのプロセスが好きですね。渡欧して5年ほど海外におりましたが、ハンガリーでは大学で一緒に勉強した室内楽仲間とラジオに生出演、生演奏していたこともありました。帰国直後は、ソロでのリサイタルがほとんどでしたが。今は大学での指導がメインになってしまって、演奏機会と言えば年4回のサロンでの演奏、ステップでのトークコンサート、録音といったところでしょうか。

田辺秀樹先生（以下田辺）　僕の場合もドイツでの留学期間の影響が大きいですね。当時、僕の憧れのアマデウス四重奏団のノルベルト・ブライニン教授に師事にし、ライン室内合奏団のメンバーとしても活動していました。ふと思えば、小さい頃、通っていたヴァイオリン教室の発表会で弦楽合奏のコーナーがあったのですが、それがとても楽しく大好きだったことを覚えています。室内楽志向となったのは、それがきっかけかもしれません。

――サロン「パパゲーノ」をちょうど1年前にお持ちになりましたね。サロンはどのように活用なさっていますか？ご自身の演奏活動にどのような変化がありましたか？

田辺　季節ごとに1回、つまり年間4回室内楽のサロンコンサートを開いています。以前は、外のホールを借りて行っていたのですが、縁あってサロンを持つこ

ピアノパートのある素晴らしい室内楽作品は沢山ある。それを弾かないなんてもったいない！

田辺秀樹先生

とができて大きく変わりましたね。50名ほどのアットホームな空間です。コンサートの休憩時間には、ワインとチーズをかこんで皆さんでお話をしています。

金子　ホールと違って客席と近いですから、お互いのコミュニケーションがとりやすいですよね。ダイレクトに演奏への反応をつかむことができます。

田辺　本番までの練習も勿論このサロンで行います。やはりひとつの楽曲を作り上げる中で、メンバーたちで自分たちの空気にしていかないといけないと思うんですね。そのためにもこのサロンで練習できることは貴重です。そのほか、妻がピアノのレッスン室として使ったり、レンタルルームとして外部にお貸ししたりしています。

―――― お二人は西武ハーモニーステーションの活動の一環として、室内楽勉強会を開かれていますね。

金子　昨年もちょうど12月1日、2日に勉強会を開いたところです。1日はレッスンを行い、2日はまずゲネプロ、その後このサロンで本番を行いました。小学1年生から大人まで、先生と生徒の二人で参加してくれた方もいました。

室内楽というと、身構えてしまう方も多いようですが、「室内楽とはどんなものか」と一歩踏み入れる勇気を持ってほしいと思います。まずは、とにかく見学に来てくれるだけでもいいんです。今回の室内楽勉強会は、2回目だったのですが、1回目から参加された方は前回より確実に上達なさっていました。「うまく弾けるかどうか、恥をかくのではないか」と言うのではなく、一緒に先生自身が勉強する機会としてとらえてほしいですね。

―――― ご家族という身近な存在の方で、他楽器の方がいらっしゃることは、金子先生のピアノ演奏に対してどのような影響を与えていますか？

金子　他楽器から学ぶことは非常に多いです。ピアノをされる方は、ピアノソロを聴くことはあっても、他楽器の楽曲はあまり聴かない方も多いですよね。私の場合は、主人と一緒にいることでシンフォニーなどピアノソロ以外の楽曲を必然的に聴くことになるので、多くの曲に出会うことができました。またピアノと他楽器の違いとして、他楽器の方には、自分の楽器がありますよね。なので、一般的にピアノ奏者よりも楽器に対する愛着や情熱が深いんです。主人はヴァイオリンを弾かなくても、時間さえあれば楽器を磨いていますからね。それを見ていると、様々な演奏の場で「そこに置いてあるピアノ」に私も敏感になったように思います。ピアノの音色にこだわる、というか。

田辺　弦楽器の立場から見ると、ピアノ奏者がいるだけで、私たちは演奏できる作品の幅がぐんと広がります。ピアノは万能な楽器ですからね。ピアノパートのある室内楽には素晴らしい作品がたくさんあります。それを弾かないなんてもったいない！今度、私たちは管の仲間とのアンサンブルをするんですよ。仲間が増えるごとに、演奏できる作品の幅も広がっていきますので楽しみです。

弦奏者は、自分の楽器に愛情を注ぎます。私もピアノという楽器そのものに敏感になりました。

金子恵先生

◀パパゲーノ演奏会チラシ

▲サロン「パパゲーノ」URL　http://web.mac.com/salon_papageno

30名のピアノレスナーから寄せられる信頼、その指導力とは？

自身の演奏活動やコンクールに出る際に、さらにワンランク上のピアノ指導者に指導することも多々あるだろう。勿論自身のピアノ指導についての助言を得るという目的もある。このようなピアノ指導者を多数教えているのが佐々木恵子先生だ。大人の生徒さんは、全員がピアノ指導者という佐々木恵子先生。佐々木先生に寄せられる圧倒的な信頼の秘密、先生ご自身の魅力にせまってみたい。

佐々木恵子先生
洗足学園音大講師、ケーエス・ミュージック主宰、当協会正会員・指導法研究委員・課題曲選定委員、各地で『脱力』に関するセミナーで好評を博している

先生の教室へ通うピアノ指導者は 30 名以上

大学1、2年の頃からピアノ指導をはじめた佐々木先生。卒業後数年はリサイタルも多々行い、ピアノ指導と演奏活動の両輪での活動であったが、今から 10 年前くらいから、指導一本にしぼることにしたという。

先生の生徒は小学 2 年から 60 代の大人まで。そのうち大人の生徒は、全員がピアノ指導者だ。元生徒はもちろんのこと、佐々木先生の講座に参加したことがきっかけで、遠く北海道から九州まで、全国各地からやってくる先生も多数いらっしゃるとのこと。先生の教室へ通うピアノ指導者は 30 名をこえる。ピアノ指導と演奏活動との両方をなさっている方が大多数を占め、その演奏活動は自らの発表会での演奏から自ら企画したジョイントコンサートの出演、コンクールでの演奏、地方オケとのコンチェルトまで多岐にわたる。ピアノ指導者が弾き続けていくことの重要性について佐々木先生は次のように語る。「ピアノ指導をする上においては、やはり弾いてきかせるのが、一番効果的ですからね。また演奏の機会を持っていないと『弾く感覚』が鈍ってしまいます。どんな場であっても私は演奏の機会を持つように、と彼女たちにに伝えています。」

彼女たちが何をレッスンに求めているのかがピンとくるんです

大勢のピアノ指導者から佐々木先生に寄せられる圧倒的な信頼、先生のレッスンの魅力とはいったい何であろうか？佐々木先生自身にお聞きした。

「レッスンに来た方々の演奏を聴いていると、彼女たちが何故ここにレッスンに来ているのか、何を私に求めているのかということがピンとくるんです。レッスンに求めるレベルは個々によって様々ですが、そのレベルを的確に見極めて本人たちに伝えることが必要です。ピアノを弾くことの根本は『脱力』にあります。その『脱力』に

◀佐々木先生のレッスン室の風景。壁の両側に楽譜がならぶ。

▲邦雄先生のソルフェージュ教室

◀生徒にも貸し出しOKのCDの棚

ついて教えられることも彼女たちがレッスンに来てくださる理由かもしれません。自分自身も習得できますし、それを生徒にも伝えられますからね。」加えて、佐々木先生のピアノ教室では、旦那様の佐々木邦雄先生が教える和声学や作曲理論講座、そのお兄様の昭雄先生のコードプログレッション講座も併せて受講する先生方がほとんどだという。一度理論を勉強した先生方も、もう一度理論を学べる機会も整っている。

若い頃のように指が動かなくても、音楽的な部分を出せればいい

ピアノ指導をしながら演奏活動をされる先生方は、自分のピアノ練習時間が確保できない、指導と演奏の両立が難しい、といった悩みを抱える方も多いことだろう。佐々木先生は彼らに対してどのようなアドバイスをされているのだろうか？

「自分の演奏活動だけに専念できた学生時代や20代とは、生活の状況が変わってきます。生徒とのレッスンの時間、結婚している方であれば家事や育児の時間などで思うように練習時間を確保できず、焦りを感じていらっしゃる方は多数いらっしゃいます。そういった部分でのメンタル的なアドバイスもしますね。練習しないと弾けなくなってしまう、と焦っている方には、『弾くことから離れなさい。弾くこと以外のことをしてみなさい』と気持ちを和らげることもありますよ。年齢を重ねるごとに技術的な部分が衰えていくのは当然ですが、それに対しても指摘しますね。『若い頃のように指が動かなくても、音楽的な表現を出せればいいじゃない』と。技術は衰えても、耳と精神は必ず成長します。大切なのは、自分がうまく弾けるか弾けないかではなく、まずステージの機会を持てたことに対する感謝の気持ちを持つことです。まぁ、それは私も同じような経験をしてきたからこそ言えることですね。」

ステップ活用

5ヶ月間で10回の参加！指導者もステップステージへ

一昨年度は2回、昨年は秋から既に10回のステップステージを重ねた木村理恵子先生。生徒をステップステージに送り出すだけでなく、自らもステップに出場することになったきっかけとは？またそれによる変化とは？

ステップ参加は怪我のリハビリがきっかけ

木村理恵子先生
千葉県柏市在住。
当協会正会員

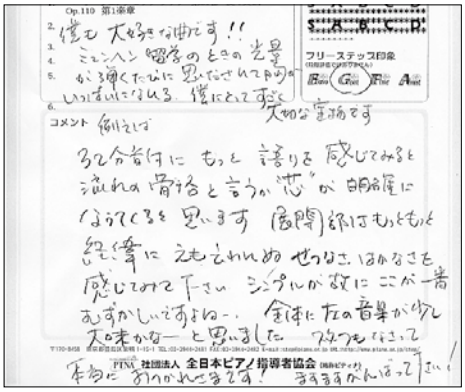
木村先生が初めてステップに出場したのは、一昨年10月の巣鴨ステップ。「実はその頃、脱臼、腱鞘炎と手の怪我が続いてしまったんです。ステップ初参加は、そのリハビリを兼ねて“もう一度人前で弾けるのだろうか”という思いからでした。」その後、去年1月に一度ご自身の関わるステーションのステップで演奏した後、9月からは月2回のペースでステップに参加。初めは毎回新しい曲を演奏していたが、あるステップで出会ったアドバイザーの先生の「大人は、ひとつの曲を何度もステージにのせて深めていくのも勉強ですよ」の言葉から、その後は新しい曲も加えつつひとつの作品も追及することも行っている。

「先生も私と同じ経験をしていることが嬉しい」という生徒の言葉

木村先生もステップに出演することで、ピアノ指導面ではどのような変化があっただろうか？「生徒にとってみると、“先生は弾けて当たり前”ではなく“先生も私たちと同じステージ経験をしている”ことが嬉しいみたいですね。」と木村先生。自分の演奏する曲について、生徒と話をすることもある。「このパッセージの音色は、私が今度弾くあの曲のここと似ているから、こういう練習をするとよいみたいよ。」と生徒への指導にも直接結びつく場合もあるそうだ。

アドバイザーからのメッセージ

ステップと言えばアドバイザーの先生からのメッセージ



▲アドバイザーからのメッセージ。ベートーヴェンのピアノソナタ第31番第1楽章を演奏した際のもの。

が参加の大きな目的だが、同じく自らもアドバイザーをされる木村先生にとってどのようなものだったのだろうか？「ほんと、ピティナのアドバイザーの先生はすごいですね。拝見していると、曲に対する自分の追求が甘かったな、と感じることもあります。アドバイザーの中には、作品への先生自身の想いを綴ってくれる方もいらっしゃいますし、具体的な練習法などメッセージ用紙の裏までびっしりアドバイスくださる方もいます。経験と実績、音楽に対する探究心をお持ちだからこそおっしゃることができるんだなと思います。」

木村先生より

私も含めてグランミューズの方は、弾き続けるためには、目に見えない部分の努力があると思うんですよ。自分の健康管理は勿論、ご家族のことも。だから弾けるときに弾いておこないと損かな、と。何も新しい曲でなくても、学生時代にさらった曲も今弾いてみると、違う観点から捉えられるおもしろさや発見がありますね。自分自身が思いきり音楽を楽しむことが何より大事です。

小学校で演奏活動

小学校の放課後に音楽にふれあう時間を

横浜市立つつじが丘小学校のキッズクラブでは、放課後に児童たちに算数、英語等を教える「放課後プラン」を実施しており、その一環で音楽の科目も行っている。「♪この指とまれ！ドレミ塾♪」の名のもとに小学１年生から３年生の20名弱の児童たちに音楽を教えるのは、笹山美由紀先生と大塚由起子先生。お二人は、ピティナではコンペ課題曲選定委員をつとめる仲間でもある。8回にわたった今回のメニューでは、リトミックや合唱合奏の実践を通して音楽の楽しさを伝える中で、子供たちがよく知っている作曲家の耳なじんだ曲を、ピアノのソロや連弾で紹介する。

音楽に対する関心度合いも様々、そんな大勢の子供たちと接する中で、先生方は、どのようなことを感じ取ったのであろうか？その感想について伺った。

大塚由起子先生
コンペ課題曲選定委員
当協会正会員

初回に、まず歌ってもらった子どもたちの歌声を聞いて、子どものまっすぐな声に驚きましたね。やはり初めは不安もありましたが、「この子たちとこれからやっていける！」と手応えを感じた瞬間でもありました。生徒たちは、もちろん個人差もありますし、1年生から3年生学年差も大いにあります。それを今回改めて実感できる機会をもてたことは、私がピアノ教師をやっていく上で大きな収穫でした。また生徒の中には、勿論ピアノなどの楽器を習っていない子どもも大勢います。そのようにもともと音楽に関心をいただいているわけではない、音楽の導入段階にいる子供たちに対して、どのようにすれば音楽に興味を持ってもらえるか、また音楽にひきこまれていくその過程を見ることができたことも、この場ならではの経験だと思っています。

笹山美由紀先生
コンペ課題曲選定委員
当協会正会員

小さな子どもたちは、ひとつの課題にすぐ飽きてしまうのも事実です。ですから、「飽きてきたな」と感じたら、次から次へといろんなことをやらせます。臨機応変に対応できるその切り替えの素早さがポイント。そして先生と生徒の距離感をはかる、ルールとけじめ。これは、導入期の子どもたちにピアノを教える際にも同じことが言えるのではないでしょうか。

今回、1年生から3年生がいましたが、その学年差は大きかったですね。この学年の幅を持った子供たちが一緒の時間を過ごすことは子どもたちにとっても意味があることですし、私たちにとっても助かりました。3年生が年上の自覚を持って1年生の面倒を見てくれるんですよ。私たちが何も言わなくても、うまくできない子どもがいたらできるまでみんなで何度も合わせてあげている光景がありました。常日頃感じているのですが、ピアノ指導でも子育てでも「みんなで育ちあがる」意識、その連帯感を大切にしていきたいと改めて実感しました。

ただいま、
講師＆スタッフ募集中！
“音楽の輪”広げてみませんか？
関心のある方は、横浜アンサンブルアソシエステーションまで。

グループで演奏活動

年間120本以上の演奏会をこなすバイタリティ

川﨑圭子先生
宮崎県都城市在住。
当協会指導者会員

宮崎県都城市の音楽教室「Keiko Music Family」で50名の生徒を教える川﨑圭子先生は、地元で大小あわせて年間120本以上の演奏会に出演する。主に、ピアノ、ボーカル、ギター、フルート、パーカッションの6名で結成される「小さな音楽会」と、ボーカル、ピアノ、パーカッションの3名から成る「音音」（ねね）のふたつのグループで活動している。「小さな音楽会」は13年の地道な活動を経て、地元ではすっかり定着した演奏会だ。今では都城市の隣に位置する三股町の「三股町文化会館」の自主文化事業として取り上げられている。声楽科出身の川﨑先生は、ボーカルを担当する。

演奏会場は、地元の公民館から保育所や幼稚園、子育て支援センター、病院、ショッピングセンター、神社まで。対象によっても演奏内容は、非常に幅広く多岐にわたる。「0歳から楽しめる！ママといっしょモーニングコンサート」では、「あそびうた」やミュージックシアター形式に。幼い子どもたちのためのコンサートでは、よく知られた絵本や児童書にオリジナルの曲をつけてお話とともに楽しめる演奏会を。小・中・高の音楽鑑賞教室では、クラシックやポピュラーを。自らのグループのオリジナルも披露することもある。「ぜひこの曲を」というお客様のためには、当日までリクエストも受け付けている。この対応範囲の広さが人気の鍵であろう。

▲▶「小さな音楽会」のステージ。「演奏する私たちの息づかいが聞こえる距離、聴いてくださる方の顔が見える高さ」をモットーに活動中。楽器のない会場でも、室内でも、野外でも出向き、出張音楽会を開催する。

▼▶コンサートのチラシ

INTERVIEW

――レッスンもありご多忙の中、ご自身の練習時間、グループでのあわせの時間はどのように確保されていますか？

とにかく空き時間を見つけて練習しています。グループ練習は、本番のリハーサルでのチェックでやってしまうことがほとんどです。新曲は、各自編曲するので、事前に各々で合せをします。

――企画をその都度臨機応変に練られていることと思います。そのアイディアはどのように出されていますか？

リクエスト、流行、季節感をテーマにメンバーで相談して決めます。コンサート中に子どもたちの反応を見て、内容を変更することもしばしば。身近なコンサートは、「なまもの」ですから、お客様の求めるものを演奏します。

24

言語の違いを超えて

アメリカの幼稚園で音楽会を日米の子どもの違いとは？

アメリカカリフォルニア州サンフランシスコ郊外にて現地の幼稚園主催の音楽会に出演する機会をもつ佐藤由有子先生。一昨年６月より今までに３回出演している。幼稚園は、日本人、アメリカ人、韓国人、スペイン人、と多国籍の子供たちが通っているため、基本的には英語と日本語を使った授業が行われているという。

佐藤由有子先生
姫路日ノ本短期大学、神戸山手高校音楽科講師、ビティナkobe風見鶏ステーション代表、当協会正会員

――― 音楽会はどのような内容ですか？先生の感想についてもお聞かせください。

アメリカ・日本の両国で長く愛されている絵本を用いた、読み聞かせの部（英語と日本語で）と、園児による音楽劇の部、その二つの部で演奏させて頂きました。絵本の読み見かせでは、私はピアノを使って即興で音楽を入れました。ちょうど欧米のシアターオルガンが無声映画で大活躍した頃の役割と同じですね。絵本をスライドにし、私も実際にその画面を見ながら即興演奏を。絵本の主人公のテーマだけをあらかじめ作っておいて、そのテーマを、場面や情感によって即興で色を変えていきます。本番はお客様の反応も加わり、前日のリハーサルとは全く違う音楽が湧いてきて、自分でも驚いたりドキドキしたり・・・。

音楽劇の部では、日々言葉が通じないもどかしさを感じつつも、共有できる言葉を選びながら一緒に遊んでいる園児たちが、言葉の壁を感じさせず自然に楽しく演技していていました。劇の終わりに子供たちの笑顔を見た時「音楽で共通の感動を分かち合えた！」と、私は涙があふれました。「音楽」は世界共通の素敵な「言葉」だと実感した感動の瞬間でした。

――― アメリカと日本の子どもたちの違いはありますか？

アメリカ人でも、はにかみ屋さんはいるし、日本人でも積極的な子供はいますから一概には言えませんが、日本の子供たちより伸びやかに感じるところはあります。

音楽劇の練習中に、園長は園児の振り付けをそろえる練習は一切されませんでした。

「お星様役の人は、ピアノからあなたたちのテーマが流れてきた時に、手でお星様を表現してステージに出ていらっしゃい」と、ただそれだけです。テーマソングを聴き逃がさないように耳を傾ける子、ちっとも聴かないので出番をしくじる子がいても、先生は全員の動きを統一することにはあまり重点を置かず＜自分の耳で確かめて行動すること＞を何度も注意されました。完成度の目標が日本とは違うと感じました。終演後、園長がある園児に「ニコラス、今日の泣き方は良かった！お客様のことを考えていつもより小さな声で泣いたでしょう？君は素晴らしい！」これが劇の途中で泣き出した３歳児への言葉です。次に繋がる励ましの言葉をもらったニコラスくんの得意げな顔が忘れられません。

個性を生かした伸びやかな教育・・私のピアノ指導の中にもそのエッセンスを取り入れたいと思いました。

合唱団を通じて

地元名古屋で「中田喜直メロディー」の継承を

ピアノから幅を広げて地域の音楽文化全体に働きかける活動をしているピアノ指導者もいる。「水芭蕉忌コンサートin愛知」の実行委員長の顔を持つ山田真治先生もそのお一人だ。

第7回目を迎える「水芭蕉忌コンサートin 愛知」

山田真治先生
名古屋音大大学院卒、中京大学・山口福祉文化大学各講師、文部科学大臣賞選考委員、当協会正会員

「水芭蕉忌コンサートin愛知」は、「夏の思い出」や「めだかの学校」「ちいさい秋みつけた」など多数の童謡・歌曲・校歌の作曲者として知られる中田喜直先生を偲ぶコンサートとして開催し、今年で7回目を迎える。中田喜直先生の生前から、その作品の伴奏や指揮を数多く務めてきた山田先生は「中田先生の歌を継承していきたい」との思いから、2002年より自ら実行委員長をつとめ、コンサートを運営している。自身は、合唱の指揮者としても活躍。2006年夏には、ルクセンブルク大公国で、在日本大使館（外務省）が主催となり、水芭蕉忌コンサート公演を果たした。58名の合唱団員を連れて、ルクセンブルクで中田先生の歌を披露した。日本の中田メロディーは、遠くヨーロッパの地で大喝采をあびた。

合唱団130名以上をまとめる工夫

コンサートに向けての練習は、年間を通じて定期的に毎月2回行っている。合唱団員は130名以上。彼らをまとめるのにはどのようなご苦労があるのだろうか？気をつけている点などお伺いした。「まず毎回のレッスンへの参加を強要しないことです。無理はさせません。ワンレッスン制と言いますか、会費も練習日ごとにいただいています。『その点が気楽でいい』と皆さんからも評判です。あと、皆さんが毎回何かしら新鮮味を感じられるような工夫をしていますよ。例えば、中田先生の作品は沢山ありますから、選曲をする際も今年は歌曲、次は童謡・・・など。毎回のレッスンでも、常に新しい話題を提供するようにしています。中田先生の新しい曲集の情報だったり、次のコンサートのゲストの情報だったり。」と山田先生。団員の方は40代以上の主婦の方が多いそうだ。「彼女たちは、影響力の大きい年齢層ですからね。彼女たちが中田先生の作品を継承していってくださることを嬉しく思っています。」

あとがき

「ピアノ指導とピアノ演奏活動」、それは「教育者とアーティスト」という相対する気質なのかもしれません。しかし、今回の特集執筆を通して、両方をバランスよく取り入れ、生き生きと活動している多数のピアノ指導者たちに出会うことができました。自らの演奏力を磨くため学び続ける指導者、聴衆のために創意工夫を重ねた演奏会をアレンジする指導者、様々な目的の演奏活動をしていらっしゃる方がいます。また、「指導者たちの演奏活動の場を提供する」「指導者に実際のレッスンを通じて演奏技術を伝授する」など演奏活動をするピアノ指導者をさらにひっぱりあげる指導者もいらっしゃいます。

そして、彼らの声を聞いていると、「先生が弾き続ける姿が生徒の学習意欲につながる」と自らの演奏活動が、ピアノ指導にも良い影響を及ぼしていることが浮かび上がってきました。皆さんは今、「自らがステージに立つ」という活動を行っていますか？今回の特集が、ご自身の今後のピアノ活動の参考になれば幸いです。（取材・構成／永田夏樹）